

汎および左側潰瘍性大腸炎 における癌：リスク決定因 子について

Cancer in Universal and Left-Sided Ulcerative Colitis: Factors Determining Risk: A. J. Greenstein, D. B. Sachar, H. Smith, et al (Gastroenterology 77: 290~294, 1979)

1960年から1976年の間にニューヨークのマウントサイナイ病院で確診された267例の潰瘍性大腸炎中に26例(9.3%)の癌の合併を発見した。全結腸炎の158例中21例(13%)、左側結腸炎では109例中5例(5%)に癌が起こった。S状結腸と直腸に限局していた5例には癌の発生をみなかった。炎症の罹病期間と癌の発生率の関連では、10年以内で0.4%、10~20年で7.4%、20~29年で15.9

%、30~40年では52.6%を示した。左側結腸炎では20年以内に癌の起こった例はなかった。30年以上の例では10例の大腸癌発生例中4例が左側型結腸炎であった。30年以上たつて癌の出た頻度は、左側結腸炎9例中4例(44%)であり、全結腸炎の場合の10例中6例(60%)に匹敵していた。癌の起こる可能性は、30年で34%、40年では64%と推定された。発症時年齢と癌の関連がよく言われてきたが、この研究では、左側型、全結腸型共に発症年齢が若かったために癌の頻度が高いという傾向を認めなかった。炎症の罹病期間が長くなると頻度が増すのであって、若年発症のためではなかった。

これまで多くの研究では、全結腸炎でのみ癌が起こったと報告しているがCookとGoligherらは、19例の潰瘍性大腸炎に合併した癌のうち

4例(21%)が脾彎曲より遠位の炎症に合併したと報告している。著者らの場合も、26例中5例(19%)が同様であった。左側結腸炎でも頻度は少ないが、炎症が30年以上たつと危険がある。

病気の若年発生と癌の合併について特に関連を見出さなかった。他の報告は関連ありというが、老年の患者での経過観察が短いことを説明に加えていない。まとめると、潰瘍性大腸炎で癌発生の危険因子は、①大腸炎の範囲が、広汎なほど癌発生率が高い、②罹病期間が長いほど頻度が上昇する。左側結腸炎でも30年以上たつと癌の危険を増す。しかし若年の潰瘍性大腸炎の発生は、罹病期間の長いという因子以外に特にリスクが大きいとは言えなかった。

(愛知県がんセンター第1内科

小林世美 抄)